

「私が入局したころ」

私の医師としての原点は、東京女子医科大学脳神経センターにある。一昨年、当科の医局員の留学に際し、モントリオール神経研究所(MHI)を訪れた。建物の外観や内部の構造が、今はない脳神経センターを彷彿とさせた。その時、脳神経センターが日本の MNI を目指していたのは間違いないと思った。

私が入局したころのことを、想いで糸を手繰って海馬から引きだしてみたい。

私たちは、団塊の世代の後の「しらけ」世代に属す。学生運動は私たちが小中学生のころ華やかであったが、喜多村孝一教授は入局に際し、「学生運動にかかわったことはあるかね？」と尋ね、同期の8名は全員「いいえ」と答えて入局を許された。

入局初日、希望を胸にやる気満々で配属された病棟へ行くと、ある先生が当時の医局の悪口を滔々と語られた。そのうえ、5時くらいになると、今日はもういいから、と言われ、同期の佐藤和栄先生と暗い気持ちとなって、とぼとぼと帰ったのを思い出す。

最初に何の手術をしたかは、今となってはまったく覚えていなかった。当時の手術記録を調べてみると、入局した年の8月20日、午前10時から、クロサブの手術を行っていた。患者さんは62歳、ICU 医長の谷川達也先生に指導を受け、同期の青木伸夫先生に手伝ってもらい、ICU のメンバーに見守られながら、なんとかやり終えたように思う。その日は充実した日であったようだ。夕方6時40分から EDH の手術も術者として行っていた。

当直の時は、術者となれる可能性のある EDH や SDH を待っていた。一方、くも膜下出血は来てほしくない疾患であった。待機的よりも急性期にクリッピングが行われるようになってきていた時期であった。顕微鏡手術は術者と助手以外、ビデオもないため、何も見えない。しかもかなり時間がかかった。一人の患者さんをよく覚えている。私が初療を担当した歯科医である。ストレッチャーを押しながら、不安そうな患者さんに「心配いりませんから」などと話をしながら手術室に入った。先輩2人が言い争いながら手術をして、そのうち術中破裂を起こし、最終的に患者さんは亡くなってしまった。外科的処置がなく、何も治療のない脳梗塞も来てほしくない疾患であった。

現在、医師になりたての研修医が病棟にローテイトしてくる。回診で、受け持ち患者さんについて質問をすると、尋ねられたことのみ答えればよいのに、回りくどく説明する。「分かりません。」と答えるべきところ、「・・・と思います。」と言う。「あやふやな情報には意味がないので、知らないならそのように答えるように。」と彼に指摘しながら、実は私も昔は同じだったと思い出すのである。

脳神経センターは、1975年に日本で最初の CT が入ったことで有名であった。地下にあった神経放射線は全国から人が集まり活気があった。亡くなられた小林直紀教授は、きびしく、せっかちで、激高型の先生であったが、裏表のないためか、皆に好かれていた。ここでは脳血管撮影の読影を鍛えてもらった。また、机の上に飲みかけのコップなどを置いてあると叱られた。今でも蓋のしていないペットボトルを見るとはらはらする。

研修医のうちは4万円しか給与がでないため、親に仕送りをしてもらっていた。早く独立したくて7月の「バイト」解禁を心待ちにした。その少し前、先輩に頼まれて行ったのは戸田中央総合病院だった。ベテランの看護師さんに聞いてなんとかやり終えたのを思い出す。しかし、給与はその場でもらえなかったのがっかりした。私の手に渡るまで時間がかかった。その先輩に振り込まれ、税金のことがあるから、など言われてなかなかもらえない。何度も早く欲しいと言ってようやく手にできてほっとした。最初は何匹も猫のいる夏目坂の四畳半の下宿に住んでいたが、収入が入るようになって近くのアパートに引っ越すことができた。

学生から医師の世界に入ったことで驚いたことはたくさんあった。まずは、医局で豪華なモンのランチを食べている先生たちを見て、驚いていた（そのうち自分も食べるようになった）。ほぼ毎日、一日中病院にいた。朝早く出て夜遅く帰り太陽にあたらないためか、春の医局旅行では、バスの中から見た緑が美しかった。泊まったのは伊豆の割烹旅館「柳生の庄」であった。こんな高級旅館があることにも、そこに泊まれることにも驚いた。

初めて手術をすると、「モートル」と言って指導してくれた先生方にごちそうする風習があった。医局に黒板があり、手術の予定が書かれてあった。術者が最初の手術の場合には旗がつけられた。うなぎや鮨の出前をとって食べた。医局でお酒を飲んで暴れる先生もいた。当直室はたたみで、りっぱな風呂もあった。昼寝をしている先生もいた。

当時はコンビニもなく、お正月はすべての店が閉まり食べるものがない。病院へ行くと、看護師さんの作るお雑煮を食べることができた。当直の時、夜の回診の最後にICUへ行くと、看護師さんが広げる夜食をつまみ食いした。また、MRさんとの付き合いも自由で、彼らは若い医師を都内のいろいろなところに連れ回した。ある高級レストランで、喜多村孝一先生が奥様と一緒に遠くにおられた。できる限り目立たないように気が付かれないようにしていたが、後で「君、いい店に行っているねえ」と言われた。

最初の論文は「新生児 glioma の一治験例」（小児の脳神経 10:29-36, 1985）である。苦勞した思いが湧いてくる。上手く書けたと思って清水隆先生に持っていくと、追加の注文がくる。また持っていくと、今度はこれをしろと言われる。最後には review もして完成させよといわれる始末（この時の経験は、指導する側として役に立っている）。当時は文献を集めるのにも一苦勞で、ワープロもなく手書きの原稿用紙のため、まとめるのに途方もない時間がかかった。一方、このころの学会発表に関しては全く覚えていない。あまり海馬周辺に影響しなかったのかもしれない。

私はこのようにして医師としての一步を踏み出した。

あれから、あっという間に40年近くが過ぎてしまった。マイクロサージェリーが確立し、脳血管内治療が発展して、脳梗塞の治療に革命が起きた。脳動脈瘤や髄膜腫の自然歴も明らかとなってきた。コンピューターとインターネットがこの世の中を大きく変え、コロナがさらに変えようとしている。私は後1年で定年となる。驚くことも少なくなってしまった。これからはせいぜい楽しくのんびりやっていきたい。

(東京女子医科大学 50 周年記念誌寄稿)